

**外交・安全保障調査研究事業費補助金  
(調査研究機関間知的アセット共有事業) 交付要綱**

平成27年5月27日

改正 平成28年2月22日

(通則)

第1条 外交・安全保障調査研究事業費補助金(調査研究機関間知的アセット共有事業(以下「補助金」という。))の交付については、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。)、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(昭和30年政令第255号。以下「適正化法施行令」という。)及びその他の法令の定めによるほか、この要綱の定めるところによる。

(目的)

第2条 我が国の外交・安全保障調査研究機関の国内外での情報発信における取組を強化することにより、国際世論形成に際しての我が国の影響力を高めるとともに、日本の総力を結集した「主張する外交」を実践・強化し、以て日本の国益の更なる増進を図る。

(交付の対象及び補助率)

第3条 外務大臣(以下「大臣」という。)は、補助事業者が行う下記に掲げる事業(以下「補助事業」という。)を対象に補助金を交付する。

- (1) 日本外交に関する我が国の良質な論文等の選択及び英語を始めとする主要言語への翻訳
- (2) これら論文等をめぐる諸外国シンクタンク・有識者等の理解の促進及びシンクタンク間の議論を通じたネットワークの構築
- (3) 同議論の世界への発信及びこれを通じた国際世論形成への参画

2 補助対象経費は、補助事業に要する経費のうち補助金交付の対象として大臣が認める経費(以下「補助対象経費」という。)とし、補助金の額は予算の範囲内で定額とする。

3 補助対象経費は、別表のとおりとする。

(補助金の交付の申請)

第4条 補助事業者は、補助金の交付を受けようとするときは交付申請書(第1号様式)及び事業計画書を大臣に提出しなければならない。

2 前項の申請書及び事業計画書は、正副計2部を提出する。

3 なお、各事業の支払計画(第2号様式)については、下半期分は10月中に報告するものとする。

#### (交付決定の通知)

第5条 大臣は、前条の規定による交付申請書の提出があつたときは、審査の上、交付決定を行い、交付決定通知書(第3号様式)を補助事業者に送付するものとする。

2 大臣は、必要と認める場合には、交付申請に係る事項につき修正を加え、又は条件を付して交付決定をすることができる。

#### (申請の取下げ)

第6条 補助事業者は、交付決定の内容又はこれに付された条件に対して不服があることにより、補助金交付の申請を取り下げようとするときは、交付決定の通知を受けた日から15日以内にその旨を記載した書面を大臣に提出しなければならない。

#### (経費配分又は事業内容の変更承認)

第7条 補助事業者は、補助事業に要する経費の配分の変更、補助事業の内容の変更又は経費の配分の変更及び補助事業の内容の変更をしようとする場合は、あらかじめ変更承認申請書(第4号様式)を大臣に提出し、その承認を受けなければならない。ただし、右変更が、計画された事業の新たな事業への変更等、経費の目的又は補助目的を実質的に変更するものではなく、かつ右変更がより効率的な経費使用又は補助目的達成に資する軽微な変更である場合はこの限りではない。

2 大臣は、前項の承認をする場合において必要に応じ交付決定の内容を変更し、又は条件を付することができる。

#### (契約等)

第8条 補助事業者は、補助事業を遂行するため売買、請負、その他の契約をする場合は、一般の競争に付さなければならない。ただし、補助事業の運営上、一般の競争に付することが困難又は不適當である場合は、指名競争に付し、又は随意契約をすることができる。また、補助事業の一部を他の者に遂行させる場合は、国が行う契約の方式に準じた契約を締結し、事前に大臣の承認を受けなければならない。

#### (補助事業の中止又は廃止)

第9条 補助事業者は、補助事業を中止又は廃止する場合においては、中止(廃止)承認申請書(第5号様式)正副計2部を大臣に提出し、その承認を受けなければならない。

(概算払)

第10条 大臣は、別紙第6号様式により請求を受けた場合、必要があると認められるときは、財務大臣と協議の上、概算払いすることができる。

(状況報告)

第11条 補助事業者は、補助事業の遂行及び支出状況について、10月末までに第1四半期及び第2四半期の遂行状況報告書(第7号様式)正副計2部を大臣に提出するものとする。また、上記以外でも、大臣の要求があった時は、速やかに遂行状況報告書(第7号様式)正副計2部を大臣に提出しなければならない。

(補助事業の遅延又は遂行困難の場合)

第12条 補助事業者は、補助事業が予定の期間内に完了しないと見込まれる場合、又は補助事業の遂行が困難となった場合においては、速やかに大臣にその理由及び補助事業の遂行状況を記載した書類を正副計2部提出し、その指示を受けなければならない。

(実績報告)

第13条 補助事業者は、補助事業を完了したとき又は中止若しくは廃止の承認を受けたときは、補助事業の完了した日又は中止若しくは廃止の承認を受けた日から起算して1か月を経過した日又はその翌年度の4月10日のいずれか早い日までに、補助事業の成果を記載した大臣が定める補助事業実績報告書(第8号様式)正副計2部を作成し、大臣に提出しなければならない。ただし、提出期限について大臣の別段の承認を受けたときは、その期限によることができる。

(補助金の額の確定等)

第14条 大臣は、前条の報告を受けた場合には、報告書等の書類の審査及び必要に応じて現地調査等を行い、その報告に係る補助事業の実施結果が補助金の交付の決定の内容(第7条に基づく承認をした場合には、承認された内容)及びこれに付した条件に適合すると認めるときは、交付すべき補助金の額を確定し、補助事業者に通知する。

2 大臣は、補助事業者に交付すべき補助金の額を確定した場合において、既にその額を超える補助金が交付されているときは、その超える部分の補助金の返還を命ずる。

3 前項の補助金の返還期限は、当該命令のなされた日から20日以内とし、期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る期間に応じて年

利10. 95%の割合で計算した延滞金を徴するものとする。

(交付決定の取消し等)

第15条 大臣は、次に掲げる場合には、第5条の交付の決定の全部若しくは一部を取り消し、又は変更することができる。

- (1) 補助事業者が、補助金等の交付の決定の内容、これに附した条件、法令、本要綱又は法令若しくは本要綱に基づく大臣の処分若しくは指示に違反した場合
- (2) 補助事業者が、補助金を補助事業以外の用途に使用した場合
- (3) 補助事業者が、補助事業に関して不正、怠慢、その他不適当な行為をした場合
- (4) 交付の決定後の事情の変更等により、特別の必要が生じた場合又は補助事業の全部若しくは一部を継続する必要がなくなった場合

2 大臣は、前項の取消しをした場合又は第9条の補助事業の中止若しくは廃止の承認をした場合において、既に当該取消し等に係る部分に対する補助金が交付されているときは期限を付して当該補助金の全部又は一部の返還を命ずる。

3 大臣は、第1項(1)から(3)までの場合の取消しに基づき前項による返還を命ずる場合には、その命令に係る補助金の受領の日から納付の日までの期間に応じて、年利10. 95%の割合で計算した加算金の納付を合わせて命ずるものとする。

4 第2項に基づく補助金の返還及び前項の加算金の納付については前条第3項の規定を準用する。

(財産の管理及び処分の制限)

第16条 補助事業により取得した1件50万円以上の財産は、適正化法施行令第13条第4号の規定に基づき、大臣が定める処分制限財産とし、補助事業者は、次の各号に掲げる事項に従わなければならない。

(1) 当該財産は、補助事業完了後においても、大臣が別に定める期間(「減価償却資産の耐用年数等に関する省令」を勘案)は、善良なる管理者の注意をもって管理するとともに補助金の交付目的に従って使用し、その効率的運営を図ること。

(2) 前号の大臣の定める期間内に、当該財産を処分する場合は、あらかじめ大臣の承認を受けなければならない。大臣は、処分することにより補助事業者収入がある場合は、その収入の全部又は一部を国庫に納付させることがある。

(補助金の経理)

第17条 補助事業者は、補助事業に係る収入及び支出については、他の経理と区分し、これを帳簿に記入してその出納を明らかにしなければならない。

(収益納付)

第18条 補助事業者は、補助事業の遂行により相当の収益が生じた場合は、これを大臣に報告することとし、大臣は、交付決定額を限度として補助金交付の目的に反しない場合限り、その収入の全部又は一部を国に納付させることができる。

(証拠書類等の保存)

第19条 補助事業者は、補助事業に係る帳簿及び証拠書類を補助事業終了の翌年度から5年間整理保存しなければならない。

附 則

本要綱は、平成27年度の補助金に適用する。

附 則

本要綱は、平成28年度の補助金に適用する。

別表(第3条関係)

費目	費目別内訳
1. 謝金	セミナー・シンポジウムのスピーカーへの謝礼 等
2. 旅費、日当、宿泊費	国外旅費、国内旅費、日当、宿泊費、その他雑費 等
3. 招へい費	旅費、滞在費 等
4. 国際会議等運営費	会場借料、機器借上費、会議費、レセプション経費、その他会議運営に必要な経費等
5. 翻訳料	本補助金対象事業の実施に必要な翻訳を依頼する場合に支払われる経費
6. 学術誌作成・投稿費及び広報費	原稿料、校正費、印刷費、データ加工費、HP 作成費 等
7. 事業推進費	1～6の他に事業を遂行するための経費(例:人件費 等)
8. 事業管理費	1～7の合計額の10%を上限とする。

(注)なお、各経費相互間の流用で、流用先の経費の20%を超えない配分は、第7条第1項にいう軽微な変更と判断される。